

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第114回

Code for 活動2年生から見たシビックテックの魅力とその実践

● Code for Mitaka / Musashino 石井 将直(いしいまさなお)
Twitter @code4mm

はじめに

```
while (Japan.recovering)
  we.hack();
```

本稿は、シビックテック活動を始めて1年少しと、まだ活動歴が長くはない筆者の視点から、より幅広く、より多くの人にシビックテック(Civic Tech)やガブテック(Gov Tech)について知ってもらい、今後もあらゆる人たちに参加してもらいたいという思いから書いています。本活動の可能性を少しでも広げることにつながれば幸いです。

東日本大震災からちょうど10年が経過した今年2021年。2020年初頭から現在まで、日本国内のみならず世界的に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行に見舞われています。みなさんも大なり小なり、生活に何らかの制約を受けたり、変化が及んだりしていると思います。

そうした中、自らの手でIT・テクノロジーを活用・駆使しながら、自分たちの暮らしをより良くしていくという取り組みである「シビックテック」や「Code for X」^{注1}といった団体の認知度や注目度、重要性が高まっています。そのことを筆者自身も実際の活動やメディアを通して日々実感しています。

コロナ禍の影響が顕在化してきた2020年3月ごろ、オープンソース、オープンデータといった誰もが参加できるしくみを利用してスピーディに作成・運用され、全国的にも展開された「東京都 新型コロナウイルス感染症対策サイト」^{注2}。その開発を担当

注1 「X」には地域名や活動対象名などが入ります。

注2 <https://stopcovid19.metro.tokyo.lg.jp/>

した一般社団法人コード・フォー・ジャパン(Code for Japan)にも多くの人の関心や目が向くきっかけとなりました。

コミュニティや交流が楽しく、地域愛や多様さも魅力

筆者は2019年の暮れにCode forと本格的に出会い、その理念や考えを知りました。多数のシビックテック団体が日本各地で活動を展開していますが、筆者がとくに惹かれたのは、その主体であるプレイヤーや多岐にわたる活動内容、地域やテーマによって異なる独自性と自由さでした。

各団体がゆるくつながり合うことで全国的なコミュニティ(シビックテック・ネットワーク)とも呼べるものが形成されています。Code for Japanをハブとして、パートナーシップを結ぶBrigade(ブリゲード)^{注3}という関係性もこのつながりを支えていると言えるでしょう(図1)。

また、全国のシビックテック団体やプレイヤー同士をつなげる場を設け、ともに共通課題に取り組んでいる一般社団法人シビックテックジャパン(CIVIC TECH JAPAN)の存在も見逃せません。筆者も同団体が開催した2020年2月のシビックテック車座会議 #10「みんなの活動共有の会」に出演し、自身について報告、共有しました(図2)^{注4}。

現在は、さまざまなシビックテック団体が毎週ど

注3 消防団や旅団を意味する言葉で、現在100団体近くを数えます。

注4 <https://www.youtube.com/watch?v=2-GBfmae0xU>

こか(おもにオンライン)でハッカソンや井戸端会議、ウェビナー／セミナー、ディスカッションなどさまざまな催しを行っており、シビックテックが盛んであることがうかがえます。

1つの生き方であり思想

筆者は普段、Web・ITの開発者、コンテンツ制作者などの仕事をしています。ある時期からよく「いったい何のためにこうした仕事をしているのだろうか?」「今後何を目指して、どう生きていけばいいのだろうか?」と自問自答していました。

シビックテックやCode forの行動原理や指針は、これらの問いにダイレクトに答えてくれるものでした。自分たちの生活や暮らしのさまざまな事柄や課題を常に自分ごととして、自らの力で作り上げたり、解決したりしていく。そのためにITやデータを活用する。会社勤務から独立という選択肢を選び、歩き始めた自分の生き方とシンクロし得ると感じ、この考えとともに行動していくことを決めました。

災禍がDXやモチベーションを後押し?

筆者在住の東京都三鷹市・武蔵野市で立ち上がっていたものの、休止していたCode for Mitaka / Musashinoを再起動(リブート)する形で動き出したのは2020年1月。両市とも特徴として市民活動が盛んで市民の意識の高さを感じる自治体です。都市と自然がうまく調和し、都心へのアクセスがよく住

環境としての条件にも恵まれています。技術面だけでなく人材面でも何かおもしろいことができそうだという予感がありました。

新型コロナウイルスが世界に広がり始めたのもちょうど前述の活動を始めたころ。再始動当初は実働的な仲間もおらず、知名度もなく「しばらくは1人でひたすら地道にコツコツやっていくことになるかな」と思っていました。

ですが、2、3ヵ月が経ったころから地域でシビックテックに関心を持ち、活動のドアを叩いてくれる仲間や応援してくれる人が周囲に自然と増えていきました。情報発信を続けた効果も実感としてありますが、前述の「東京都新型コロナウイルス感染症対策サイト」とCode for Japanが話題や注目を集めたことも大きな要因に挙げられるでしょう。

通勤や買い物、リアルでの集まりなどが制限され、在住地域に目が向く機会が自然と増え「自分も何かしてみたい」という人が多くなった結果ともとらえられます。何より筆者自身も災禍をきっかけに周囲に貢献したい、閉塞を打破したいという熱やモチベーションが高まり、活動を後押しされた側面があります。

日本のシビックテックは、2011年3月の東日本大震災のあとにsinsai.infoやHack for Japanが立ち上がり、その後Code for KanazawaやCode for Japanなどの活動にもつながり、広がっていきました。災禍の発生はけっして喜ばしいものではありませんが、デジタル・トランスフォーメーション(DX)の促進や、シビックテックが存在意義や価値を発揮するうえできっかけになっていると感じることもあります。

◆ 図1 Brigadeネットワークの広がり



◆ 図2 シビックテック車座会議 #10「みんなの活動共有の会」





参加にITの得意・不得意は関係ない

シビックテックやCode for について説明するとき、「市民の力で行政サービスの改善や社会課題の解決を目指すこと、またはそれを実践する人たち」という決まり文句やイメージが前面に躍り出ることがあります。社会貢献や課題解決も大切なテーマの1つですが、それだけがすべてではないと筆者は考えます。

要は「テクノロジーは目的を達成するためのツールであり手段の1つ。それらを使って趣味的に、人生をより楽しく豊かにしよう!」というものではないでしょうか。主役はテクノロジーではなく、プレイヤー=人です。そして、このマインドはいわゆるDIY精神やハッカー精神といったものに通じるところがあると感じます。

いろいろなところで口にしたたり、書いたりしていますが、Code forの「Code(コード)」は、プログラミングのコードやテクノロジーのみを指すわけではありません。私たち市民生活を営む人間一人一人が、もっと自分たちの生活をよく、おもしろくしたいという“思い”、それによって起こす“行動(アクション)≒Code”だと拡大して解釈しています。

IT技術者や関連従事者はシビックテックを実践するうえで重要な役割・ハブを担いますが、彼らだけがプレイヤーなのではなく、さまざまな技能やマインドを持つ人たちが集い、各自ができることやアイデアを持ち寄って協働していくことこそがシビックテックの本質なのです。

本稿を読み「自分にも何かできることがあるかも」と興味を持った方は、お近くのシビックテック団体を探してドアを叩いてみる、または、なければ自分で始めてみてはいかがでしょうか。

楽しさ重視、気楽でなければ続かない

台湾のIT担当大臣(政務委員)オードリー・タン氏は、デジタルソーシャルイノベーションを成功に導く要因として「Fast(速さ)」「Fair(公平さ)」「Fun(楽

しさ)」の3つのFを挙げています。このうち「楽しさ」という点を意外に思う人もいるかもしれません。

Code for Mitaka / Musashinoでも、IT関連だけでなく多様な人たちが集って「誰もが楽しく、一緒にIT・テクノロジー活用!」「『楽しく、無理なく』をモットーに」などの合言葉を日々掲げながら、気楽にワイワイと楽しく行動しています。

3つの活動方針と実践し大切にしたいこと

本節では筆者が代表を務めるCode for Mitaka / Musashinoについて紹介します。現時点で掲げている3つの活動方針というものがあります。それらに沿ってどんなことをしているかを紹介します。

地域そのものや地域活動との連携、連動

地域とのつながりを軸に、それぞれのやりたいことや得意分野を活かしてさまざまなことにチャレンジしています。

2021年に入ってからさまざまなメンバーが参画し、三鷹・武蔵野のエンタメと人をつなぐ「カルチャーデザインプロジェクト」というプロジェクトが始動しました。音楽アーティストでもあるメンバーがシビックテックと音楽・エンターテインメントをかけ合わせ、楽曲を制作して地域を盛り上げる企画などを実施しています。

また、東京の多摩地域にはCode forやシビックテック団体が多く存在しており、最近「Code for 多摩エリアネットワーク」と称して、連携や交流を意識して呼びかけ、つながり始めています。

「オープンデータ利活用」と「IT・Webで街と人をおもしろく」

あるメンバーの提案で「プラスチックフリーのお店地図」という、エコな取り組みをするお店をWebマップ上で見られるようにしよう、というプロジェクトがあります。これを持ってCode for Japan主催のソーシャルハックデー(Social Hack Day)にも参加しました。

また、世界の大半のWebサイトで導入されているCMS(コンテンツ管理システム)であるWord

Pressのコミュニティイベントとして「三鷹・吉祥寺 WordPress Meetup」の主催・運営を行っています。図3の可愛いキャラクター（ご当地わぶー）もメンバーで制作したものです。

2021年1月には、感染状況をグラフ・マップでより見やすく、わかりやすくする「COVID-19 データビジュアライゼーション」^{注5}を公開しました。Tableau^{注6}というデータをビジュアル化できるツールでメンバーが作成したものを、公式サイトに埋め込み、三鷹市、武蔵野市といった市単位でも感染状況が見られるグラフ（図4）を公開しています。また「東京都全区市町村版」「やさしいにほんご版」「データセットの公開」などコンテンツにバリエーションを持たせ、メンバー間で「これは必要そう」「おもしろそう」など話し合いながら工夫も試んでいます。

アクセシビリティ／インクルーシブなど多様性を大切に

イベントサポート、配信サポートなどをする中で、コミュニケーション支援・会話の見える化アプリ「UDトーク」の活用推進や、アクセシビリティ／インクルーシブの考え方をテクノロジーで示し広げていくことなどもできることの1つだと考えています。

同時にユーザー体験（UX）を考慮し、長く使われるために拡張性・汎用性を持たせつつシンプルなモノを作っていくことも、これからのシビックテックには必要だと感じます。

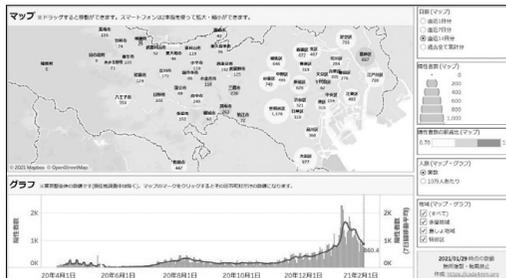
1年足らずで十数人も能動的に活動する仲間が集ってくれたことは多様性の実践と言えるのかもしれませんが。メンバーが複数人になって以降は月1回のミーティングをいろいろな形で実施してきました（写真1）。

ほかにもさまざまなプロジェクトに取り組んでいて、最近では市民NPOと共同のセミナー／ワークショップを開催・企画したり、三鷹市役所など行政との協働プロジェクトもスタートし始めています。紹介しきれなかったこともたくさんありますので、詳細はCode for Mitaka / Musashinoの公式

◆ 図3 「三鷹・吉祥寺 WordPress Meetup」ビジュアル画像



◆ 図4 「COVID-19 データビジュアライゼーション」の陽性者数グラフ（市町村別）



◆ 写真1 オフラインミーティング時に地元三鷹のクラフトビールを楽しんだ



サイト^{注7}をご覧ください。



これからも活動は閉じず、入り口は常に「半開きのドア」にしておくことと、一過性にするのではなく持続性を意識・考慮しながら、継続していければと考えています。そのために、ひとりよがりにならず自分自身と周囲にいる人たちの顔を常に思い浮かべながら「それは誰のため、何のためのシビックテックなのか？」を問い続けていきたいと思います。SD

注5 <https://code4mm.org/covid19-data-visuali/1/>

注6 Public版を使用しました。

注7 <https://code4mm.org/>